

支倉常長フェロー報告書

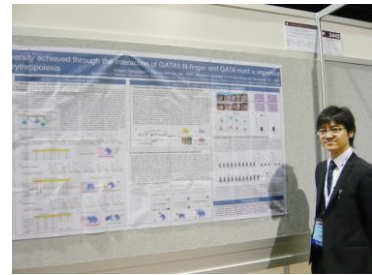
提出日 2012年 12月 17日



申請者	氏名	長谷川 敦史
	所属・職	医学系研究科医化学分野・大学院博士課程
出張期間	2012年 12月 6日 ~ 12月 12日	
渡航先	アメリカ合衆国・ジョージア州・アトランタ	
渡航目的	学会参加・共同研究のための留学・()	
発表演題名あるいは共同研究課題名	DNA binding diversity achieved through the interaction of GATA1 N-finger and GATA motif is important for embryonic erythropoiesis	

得られた成果など

私は支倉常長フェローによるご支援のもと、米国アトランタで開催された 54th ASH Annual Meeting and Exposition に参加し、上記タイトルでポスター発表を行いました。本学会は、世界中の血液学研究者が一同に会し、基礎医学・臨床医学分野の研究について、最新かつ高レベルな内容に触れることのできる貴重な機会でありました。その中で、赤血球・巨核球形成に必須な転写因子である GATA1 のアミノ末端側ジンクフィンガーが DNA 配列の多様性を認識することにより、その配列パターンに依存して GATA1 自身の結合様式を変化させること、またその機構が破綻することで、マウスにおいて致死的な赤血球分化異常を誘発することを見出した、という研究成果を発表させていただきました。



ヒトの血液疾患患者から見つかった GATA1 の遺伝子変異を、マウスを用いて再現し、また詳細な生化学解析によりその性質を明らかにした本研究は、多くの研究者に興味をもっていただき、多岐にわたる議論に繋がりました。一方で、本研究では血液学だけでなくタンパク質化学・構造生物学といった異分野の概念が多く含まれることから、多くの血液学研究者にとって普段馴染みのない実験方法について、詳細な説明を求められる機会も多々あり、要点をしっかりと押さえつつ、わかりやすく簡潔に英語で説明することの難しさを、改めて勉強させられました。また、自身の研究と似た視点で解析を行う、競争相手となる発表もあり、解析手法の差異や、互いの実験結果の検証と問題点等について、深く議論することができ、今後の研究の進展や論文執筆において大いに参考となるものでした。

本学会で知り得た知見を生かし、更なる研究の飛躍に繋げていきたいと思えます。このような貴重な経験をさせていただき、大変感謝しております。

